

## 「ナトルプ没後 100 周年シンポジウム」のお知らせ

日時：2024 年 12 月 22 日（日）15:00～18:00 ※オンライン（Zoom）にて開催

主催：科研費基盤研究 B「昭和戦前期における新カント派価値哲学の展開・意義・特色—学際的／国際的研究—」（研究代表者伊藤貴雄、課題番号 24K00017）

趣旨：

2024 年はパウル・ナトルプ（Paul Natorp, 1854-1924）没後 100 年にあたる。ナトルプは、20 世紀初頭のドイツにおいて、哲学のみならず教育や政治にも大きな役割を担った。哲学ではマルブルク学派の創設者であるコーヘンの衣鉢を継ぎ、自然科学の認識論的基礎づけに取り組む一方で、こうした認識が可能な人間の根本条件を心理学の問題として探ろうとした。またこの種の認識が歴史上、特に古代哲学においてどのような機能を有していたかを『プラトンのイデア論』で論じた。こうした幅広い哲学の探求は、フッサールやハイデガー、ガダマーといった後の現象学・解釈学やリヒャルト・ヘーニヒスヴァルトといった新新カント派の創始者、はてはオルテガ・イ・ガセットといったスペインの哲学者にも強い影響を与えた。

教育学においてもその影響は大きい。日本でもかつてはディルタイやデューイと比肩される存在であり、ドイツではナトルプの名を関したギムナジウムが残っている。実際、ナトルプは政治において教育改革に発言力を有しており、ツィラーやラインらのヘルバルト学派、ディルタイらの精神科学的教育学と並ぶ一学派を作り上げていた。その思想は、ヘルバルト学派の個人主義的方針に反対し、民族から普遍的人間への教育を目指すものであった。こうした背景からナトルプは、政治的にリベラルでありながら、戦争肯定をし、いわば SPD のスポークスマンとして活躍した。これは、青年運動に積極的に参加した人間の一つの典型例であり、自由の謳歌と戦争の賛美が結託することに対する後の世代の反感を生むきっかけともなった。

このような大きな影響を与えながらも今日ナトルプはほとんど顧みられていない。ナトルプ没後 100 年に回顧の機会を設けたのはこれまでチリの Diego Portales 大学の研究グループが開いた Paul Natorp and the Legacy of Critical Idealism のみである。しかし、今日われわれは教育、哲学、政治、さまざまな局面から 20 世紀初頭と同じ経験をしているように見える。つまり、自由な教育運動と伝統的権威の相克、グランドセオリーの崩壊と理性への不信、戦争とプロパガンダといったまさに戦前の回帰が今見出されうる。そこで、ナトルプを回顧することは、こうした時代においても十分意義があるように思われる。そして、なお理性を信じるのがいかにして可能であるのか、これを再びナトルプから問わねばならない。

登壇者：（発表順は未定）

「ナトルプとは誰であったのか——「一般論理学」構想を中心に」

下山史隆（京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程）

「ナトルプの心理学とフッサールの現象学」

植村玄輝（岡山大学学術研究院社会文化科学学域准教授）

「日本哲学におけるナトルプの影響——初期田辺の数理哲学に寄せて」

山本舜（神戸市立工業高等専門学校一般科講師）

特定質問者：森祐亮（大阪大学大学院人間科学研究科助教）

※参加をご希望の方は伊藤貴雄（[itotakao@soka.ac.jp](mailto:itotakao@soka.ac.jp)）まで事前にメールにてご連絡ください。